

第一話 梅雨の始まり

—

大沢直哉（おおさわなおや）。二十歳。

ジメジメと湿度の高まってきた六月の始め。日曜日。

朝からの雨で出かける気も起きず、一日中家でゴロゴロしていると、夕方頃にスマホの通知が鳴った。

画面を開くと、ゲイ向けの出会い系アプリにメッセージが来ていた。

はじめまして。プロフィール見て、タイプだなと思って連絡しました」

送ってきたのは三十代の男だった。プロフィール写真は顔無しで、体型だけが写っていた。肥満気味の、それなりに大きな体だった。

顔写真無しでよくメッセージなんて送ってくるよな

直哉はしばらく写真を眺めた。顔が不細工の可能性もあるけど、体型だけはまあ悪くないかと思った。

はじめまして。メッセージありがとうございます」と返した。

すぐに返信が来た。オオさん大きくて、かわいいですね」

“オオ”は直哉のアプリでの名前だった。

かわいい

その言葉が、画面の中で少し光った気がした。

直哉は自分のプロフィール写真を見た。顔の角度を研究して、一番盛れると思った角度で撮った写真だった。色白で、丸い顔で、目つきは少し悪いが、自分ではそれもそれで“魅力的”だと思っていた。

直哉は一七〇センチ、一〇二キロのいわゆる肥満体型。運動部とかも入ったことないから筋肉なんて全くない。手足も短い方で、いわゆる幼児体型に近かった。でも、そんな体型だからこそ愛嬌があって万人受けすると思っている。

ありがとうございます。うれしいです」と返した。

「どのあたりにお住まいなんですか？」

「都内です」

「じゃあ近いですね。もしよかったら今度ご飯でも行きませんか」

「ナオは少し間を置いた。会ったことのない人間と会うことへの警戒心より、かわいいと言われたことへの心地よさの方が大きかった。

考えます。予定確認させてください」とじらすように返した。

「主導権はすでにこちらが握っている。そう思った。

アプリを閉じた後も、かわいいですね」という言葉が頭の中に残っていた。

直哉が出会い系アプリを始めたのは、大学に入ってからだった。地方から上京して一人暮らし。やっとゲイとして自由に行動できる環境になった。高校までは何もできなかった。田舎で、周りに同じような人間がなくて、ただ大人しく黙って過ごしていた。

自分は本当は“陽キャ”なのだ。

これまでずっと見ていた。SNSで、ゲイであることを堂々と発信している人たちを。仲間がいて、ゲイバーに行つて、楽しそうにしている人たちを。

その中心にいたべきは自分なのに

どの写真を見ても自分よりかわいい人なんて一人もいなかった。それが尚更氣に入らなかった。

二

初めてゲイバーに行ったのは半年前の年末、一応ちゃんと二十歳になってから。名前はもう忘れたが、アプリで知り合った男にそれとなくお願いして連れて行ってもらった。

金曜日の夜。東京のあるエリア。細い路地を入ったところにあるバーだった。

扉を開けると、思ったよりも広めの店内、カウンターには三人、奥の広めのテーブル席には四人組が座っていた。カウンターの向こうに四十代前半っぽいママと、若い店子がいて、常連らしき客と話していた。

『うっしょい』とママが言った。

直哉は少し緊張していた。でもそれを悟られたくなくて、涼しい顔をした。連れてきてくれた男がカウンターに座って、自分と直哉の飲み物を頼んだ。

初めて?』とママが直哉聞いた。

まあ、はい」

そう見えないわね。堂々としてるから」

直哉は少し嬉しかった。でも自分は“陽キャ”だから、こういうところにすぐに馴染めるんだと思った。

カウンターに座ると、隣の席の男が話しかけてきた。四十代後半くらいのおじさんだった。

「こんにちは。かわいいね。何歳?」

「二十です」と少し元気な声で言う。

若いねえ。この辺来てどのくらい?」

「二年です」

ぞっか。ここにはよく来るの?」

「や、実は初めてで…」

名前は?」

才です」

軽率に本名は名乗らない。

才くん、よろしくね。若いかわいからどこ行ってもモテそうだよー」

素直に嬉しかった。やっぱり自分はかわいいんだ。モテるんだ。

そのおじさんと少し話した後も、他の人に話しかけられて、たくさんしゃべって楽しかった。初めてなのに飲みすぎて完全に酔っぱらった。

かわいい、かわいいってみんなが言っていた

その夜は家に帰った後も気が高ぶって眠れなかった。

今夜のことを誰かに話したかった。でも話せる相手がいなかった。なんでもかんでも話せる友達なんていなかったし、きっと、自分の感じているこの最高の気分を味わったことのある人間なんて、そうそういないだろうし。

まあいいか

これからあそこに行けば、みんなに囲まれて、褒められて、嫌でも心が満たされる。

三

翌日、直哉は昨夜のことをSNSに投稿することにした。

初めてのゲイバー！最高！またすぐ絶対行くー！」

写真は、ゲイバーの中で撮った自撮りとお酒の写真。自撮り写真の中の直哉は、片目をつぶり舌をちよろつと出してピースをしていた。まさに自分の思い描いていた“陽キャ”そのものだった。

投稿してスマホを置いた。あえて通知は切った。
三分後に開いた。

“いいね”が三件しかついていなかった。

うん。まだ大丈夫。こんなもん、こんなもん

また置いた。

さらに五分後、また開いた。

五件……。思ったより少ない。

あれ？なんか変なところあったかな

写真を見返すが特に変なところはない。むしろ完璧でしかなかった。

またスマホを置く。今度は朝ごはんを食べ終わるまで触らないことにした。

三十分後、少しはやる気持ちでスマホ開いた。

十二件……。最後に“いいね”がついたのは十分前。多分この調子だともうそんなに増えないだろう。

少し残念な気持ちになりながら、頭の中で直哉は言い訳をしていた。

フロロワーは今は一三〇人ぐらい……鍵付きアカウントだから、十人に一人は“いいね”していることになる。それで充分なんじゃないか？ほとんど全員会ったことないし、僕のことを遠すぎる存在だと思って何も思わないんだ、きっと。きっとそうだ

そう思いながら、投稿を見た人のうち“いいね”を押さなかった人を何人かブロックした。

別にいいよね。僕に興味ないんだし。互に興味ない同士でつながっても意味無いし。フロロワーが目減りしちゃうのは嫌だけど、まあそれはこれからどんどん増えるから問題なしだよ

“いいね”はどれも会ったことのない人からだった。見てみると、おそらく五十代以上で直哉と年の離れた人たちばかりだった。

コメントが一件来ていた。

かわいいですねー！」

そんな事知ってる

その日の夜、投稿を確認しても“いいね”は十四件で最後に見た時から二件しか増えていなかった。なんだかつまらなくなつて、直哉はSNSから投稿を消して、スマホをベッドに放り投げた。

その日、ベッドに潜ってから眠る前に、直哉は自分のSNSのプロフィールを見直した。写真を変えた。昨日ゲイバーで撮ったものの中で、一番盛れているものを選んだ。お酒で少し酔つて、顔を赤くしながら目が少しトロンとしたような写真。少しエッチな感じがすると自分で思ったものを選んだ

自己紹介文も書き直した。『70.102.20 都内在住。色白のただのデブ。よくかわいいと言われます。ウケです』

最後に梨の絵文字を付けて彼氏がないこともアピールしておいた。

“ウケです”と書いた。本当はタチだったけど。自分のかわいさはウケというポジションと親和性が高いと思ったからそう書いた。

どうせ誰かと会っても実際にやるかどうかは、その時決めるし

アカウントも鍵なしの設定に変えた。

保存して、スマホを閉じた。

四

それから二週間も経つと、直哉のフォロワーは三百人を超えていた。

ゲイバーに顔を出すたび、新しく知り合った人とSNSを交換した。それに加えて、毎日SNSで投稿もした。バーに行った日の写真。お店の料理の写真。出掛けた先の街の写真。全部に自分の自撮り写真を添えた。どれもそれなりの数の“いいね”がついた。

それよりも一度、自宅の洗面所の鏡の前で上裸になっている写真を投稿したら、思った以上に“いいね”がついた。知らない人からのフォローも前より増えた。ジワジワとだが、フォロワーが増えていつて嬉しかった。

送られてくるメッセージも増えた。一日に複数人からなんて普通だった。

かわいいですね」「タイプです」「会いたいです」

そういう言葉が毎日来た。直哉はそれを全部読んだ。返信する相手と、しない相手を選んだ。写真やプロフィールを見て、自分が気に入った相手にだけ返した。気に入らなかつたら返さなかつた。返さなくても、次の日にはまた別の誰かからメッセージが来たから。

自分は選ぶ側の人間だ。特別な人間なんだ、と直哉は思った。

自分のやること、考えることは全部正しいとも思うようになった。

実際に誰かと会っても、会話が弾まなかつたら相手のせい。僕が話し相手になってあげているのに、この人はきつと“陰キヤ”なんだなと決めつけた。僕がメッセージを返さないのも相手のせい。僕に会えるほど自分が魅力的だと勘違いしているイタい人、変な人なんだと思った。

ある夜、アプリに長めのメッセージが来た。

突然すみません。ゲイの方向けのAVの出演者を探してしまって、ナオさんのプロフィールを見て、ぜひお願いしたいと思いました。報酬は応相談です」

直哉はしばらくその文章を見ていた。AV……。しかも自分でも知っているレベルだった。かなり有名で多分みんな知っているところ。

直哉はパソコンの画面に映る自分の姿を想像した。自分のかわいさが映像として残る。もつと多くの人間に見られる。

少し考えて、返信はしないことにした。そんなことしなくてもこれから人気者になるんだし、AVに出る必要はない。

そう思いながらも、一応そのメッセージは削除しないでおいた。

五

六月中頃のある夜、深夜二時。

直哉は布団の中でスマホを見ていた。

SNSのタイムラインを流し見た。知らない人間の投稿。ゲイバーで撮った写真。誰かと飲んでいる写真。団体旅行の楽しそうな集合写真。全然かわいくない自撮り写真。

直哉はそれらをしばらく見た後、自分の投稿の“いいね”の数を確認した。

今日の投稿は四十三件。昨日は五十一件。

ここから全然伸びないなあ。なんでだろ

写真が悪かったか、投稿する時間帯が悪かったか。自撮りの写真はどう見ても盛れててかわいかった。

考えながらまた他の人の投稿を見た。“タツツ”という名前の、フォロワーが八百人以上いるアカウントだった。『68.97.32 筋トレ始めました！食べるこゝと、旅行など何でも好きです！よろしくお願いします！』

つまらないプロフィール文だと思った。自分より全然年上のおじさん。プロフィール写真を見ると明らかに自分よりかわいくなかった。髭も生やしていた。

体型も…確かに筋肉もあるけど脂肪もある熊みたいな見た目。いかにも“私はゲイです”みたいな雰囲気隠さず出している人みたいだった。直哉にはなんだかそれ、他のゲイに媚びているように見えた。わたしと友達になればあなたも立派なゲイの仲間入りですよ、と言われていた気がした。

まあ、僕とはジャンルが違うかな
でも…、どう見ても僕の方がかわいくてモテるはずなのに、この人のフォロワーは八百人以上もいる…。なんで？

少し気分が悪くなって、スマホを伏せて天井を見た。目をつぶる。眠れる気がしなかった。

今日もみんなに「かわいい」と言われた。“いいね”が来た。メッセージがたくさん来た。全部、うまくいっている。なのに、全然満たされた気がしない。

またスマホを開いて、タイムラインを流し見た。

